

■いわて文化ノート

供養のかたち～盂蘭盆会雑記

学芸員 川向富貴子

皆さんは、「盂蘭盆会」という行事をご存知でしょうか。盂蘭盆会は1年というサイクルのなかで正月とともに重要視される行事ですが、「うらばんえ」という行事の名称自体は一般になじみ深いものではありません。しかし、ご先祖様などを迎え精一杯のもてなしをするという行事の概要を知れば、誰もが「盂蘭盆会＝お盆」の図式を連想し、その光景を思い浮かべることができるでしょう。そんな国民的行事であるお盆ですが…。この時期の過ごし方といえば、里帰りする、地域を離れずにご先祖様をおまつりし訪ねてくる親族などとの交流に終始するというパターンが一般的で、意外と他所のお盆の慣わしをご存知ない方が多いようです。そこで、本頁では岩手県内のお盆の習俗のなかで、特に地域性が顕著な例を紹介していくこととします。

■精霊を迎える

お盆の主演「精霊（先祖や新仏、無縁仏）」を迎えるためのオーソドックスな方法といえば、やはり火を焚くことでしょうか。



写真1 麦殻による迎え火

(紫波町高水寺地区 2003)

樺皮は入手が難しくなったため、麦殻で代用するようになったという。

お盆に火を灯す行為＝迎え火の習俗は若干の相異がみられるものの、岩手に限らず全国に見られる光景です。迎え火は、総じて精霊が来訪するための目印にすると同時に、火の浄化作用により悪いものを祓うという意味がこめられているようです。

ただし、同じ“火を灯す”という行為であっても焚く材料はさまざま、岩手では松の根や杉、芋殻（麻幹、麻の皮を剥いた茎）、樺皮（白樺）、麦殻などの使用が認められます。



写真2 店頭に並ぶラッチョク

(大船渡市盛町にて)

芋殻の先端を赤く色づけしたラッチョク（ロウソク）は、沿岸南部地域で見られる。

この違いは、それぞれの地域において安易に入手でき、かつ生活を維持していく諸活動の妨げにならない素材が選択されたことによるのでしょうか。この地域差は今日の「お盆商戦」にも多分に影響しており、スーパーマーケットやデパート等に並ぶお盆商品の品揃えに顕著にあらわれています。

《初盆（新盆）の作法》



写真3 ナノカビのトウロウギ

(盛岡市羽場地区 1994)

青・赤・黄に発色するカラフルな電球を吊り下げている。戦後に取り入れたとされるが、その契機は判然としない。

一般に、新仏（初めてのお盆を迎える死後1年、ところにより死後3年以内の精霊）がある場合は平常のお盆より長い期間（主と

して8月7日の七日盆から晦日盆まで）をかけて丁重にお祀りします。死んで間もない状態の新仏は非常に不安定な存在であることから、時に災いをもたらすと考えられていたからです。

たとえば、県央部から県南部では家の敷地内にトウロウギと呼ばれる仮設の高灯籠を立てて新仏の道標とする家が多くみられます。特に、盛岡周辺では8月になるとクリスマスのイルミネーションのごとく、暗闇に無数の小さな明かりを灯す家々が目立ちます。これは目印として高ければ高いほど良いとされるトウロウギの進化型で、より一層道標としての機能を果たすようにという迎える側の配慮によるものと理解できます。



写真4 初盆の施設

(大船渡市甫嶺・綾織地区 2005)

盆花をいけた竹筒4本に白い布をとりつけ、中央に石をのせる。布は茶幡とともに菩提寺から頒布されるもので、「迷故三界城 悟故十方仏 本来無東西 何処有南北」等と墨書されている。特に施設の呼び名はないが、昔からの慣わしであるという。

沿岸南部の場合は、トウロウギのほかに茶幡と呼ばれる紙の幡を笹竹に結わえたものを家の門口や庭に立て、さらに写真4のような設えを庭にほどこします。この布は墨の文字が消えてしまうほど良いとされ、来訪する人々は丁寧に水をかけ手を合わせます。この習わしの意味は当地での伝承が途絶えてしまいましたが、餓鬼・無縁仏に浄水を捧げる施餓鬼のための施設であったと考えられます。



写真5 四十八灯 (四十八あかし)

(九戸村伊保内地区 2004)

四十八灯の火は途中で絶やしてはならないといわれ、ロウソクが燃え尽きるまで見張りがつく。

一方、トウロウギの習俗が認められない県北部では、写真5のように48本のロウソクを門口に立てて新仏を迎えます。地域によっては49本をもって四十八灯とするところもありますが、その余分な1本はソウズカババアの分と説明づけられています。ソウズカババアとは三途の川の岸边にいて、生前の罪業の重さがあらわれる死者の着物をはぎとるといふ奪衣婆の別称です。おそらく、彼の世の門番である奪衣婆に施しをすることで精霊が来訪しやすい環境を作るという意図がこめられているのでしょう。

■精霊をもてなす



写真6 盆棚

(奥州市江刺区稲瀬 2005)

マコモ(ガツギ)で編んだコモ、和林檎、昆布、盆花、提灯、十三仏の掛軸などで装飾された盆棚。これに仏壇の位牌を移設する。盆棚の周辺には近所の人や親族から贈られた提灯を飾る。

お盆に迎えた精霊は盆棚(精霊棚)という仮設の祭壇で祀り、様々な供物をあげて歓迎します。盆棚は写真6のように木枠を組み立てたもの、仏壇の前に経机を並べただけのものなど様々にみられます。また、写真7のように盆棚を墓所に造って祀る方法も内陸部を中心に見受けられます。



写真7 盆棚

(二戸市下斗米地区 2007)

雑木の枝を組み立てたものにコモを敷き、ホトケの数分のお供え(煮しめや赤飯、菓子など)を柏の葉にのせてあげる。

■精霊を送る



写真8 キュウリ細工

(盛岡市内墓地 2004)

煮しめや赤飯、青物、菓子の中央に爪楊枝で四足を表したキュウリ細工があげられている。人的交流・情報網の拡大等の現代的事由により、年中行事の画一化が見受けられる。

お盆の一連の行事は、迎え火に対する「送り火」を焚いたり、供物や装飾品を海・川に流すなどの作法で精霊を送り出すことで完了します。こうした精霊の行き来を円滑に行うために、ナスやキュウリ、藁などで乗車・荷車用の牛や馬の細工を作りお供えする習わしが全国に伝えられています。

しかし、牛馬細工を作る習慣が伝播していない県北部の場合には非常に珍しい方法で精霊への配慮をあらわします。



写真9 お盆の供物

(久慈市山形町川井地区 2004)

上段は小麦粉に水を加え練り混ぜて茹でたものに赤飯を包んだセナカアテ。ホトケの数だけブドウの葉にのせ盆棚へ供える。下段は米の粉の団子に生米とお茶をかけた四十九ダンゴ。ブドウの葉にのせて墓所に供える。

写真9上段は、供物を背負って他界へ帰る精霊が身に着けるといふセナカアテです。これにはできるだけ多くの供物を持ち帰って欲しいという願いが込められており、厚みがあればあるほど精霊の背中への負担が軽減されて良いとされています。田野畑村周辺では更に手厚く、セナカアテのほかに精霊の杖となる夏蕎麦の茎、履物となる胡桃、他界へ帰るときの舟にする百合の根も供えます。ちなみに、セナカアテは近年商品化され県北部の店頭でみかけるようになりました。それだけ、習俗として定着しているということなのでしょう。

【付記】岩手県の広範囲にわたり、お盆に墓所へ栗の枝を立てる習わしがみられます。その由来をご存知の方、博物館までご一報いただくと幸いです。

